

マルタバン発ラングーン行き急行列車

田 中 耕 司

マルタバン（ビルマ名ではモッタマ）はサルウィン川の河口をはさんでモールメンと向かい合うモン州（以前のテナセリム管区）の小さな町である。ラングーンからモールメンへ、あるいはさらにモン州南部へと出かける人は、汽車にしる自動車にしる、いったんここで乗りものを捨て、サルウィン川を渡るフェリーボートに乗りかえねばならない。1979年1月から40日ばかり滞在したビルマでの調査のあい間に、モールメンを訪ねたわたしたちは、往路と同じく汽車でラングーンへ戻るべく、マルタバンへ渡るフェリーボートに乗りこんだ。

マルタバンの船着場から駅まではほんのわずかししか離れていない。駅周辺や構内はラングーンへ向かう人たちがごった返しており、たいへんな混雑をみせている。切符を入手するのに手間どるのはどこの駅でも同じだが、この駅ではよほど利用者が多いとみえてなかなか切符が手に入らない。ビルマ政府のお墨付きをみせてもなかなか融通してくれないので、ともかく切符売場周辺で順番を待つことにした。

おそらくわたしたちと同じ列車に乗ろうとしているのだろうか、たくさんの人々が右往左往しているのを眺めているうちに、奇妙なことに気がついた。この駅に入ってくる女たちは、老いも若きも、子供までがまるで妊婦のように大きなお腹でいかにもゆったり歩いているのである。それにしてもお腹の大きい人が多すぎる。奇妙だなと思っていたら、切符売場の雑踏のなかでひとりの女がロンジーを脱ぎはじめたのである。通常ビルマの女性はこの下には何も身につけていないといわれる。しかし、驚くなかれ、そのロンジーの下からさらに別のロンジーが現れたのである。おそらくその下にはさらに別のロンジーが隠されているのだろう。妊婦が多いと思ったのは間違いで、ロンジーを幾重にも巻きつけた女が多かったのである。彼女たちが、モールメンで手に入れた布や衣類

を身に巻きつけて運ぶ、ヤミ屋だと気がつくまでにはそれほど時間を要しなかった。駅周辺だけでなく、構内に入ってもヤミ物資の交換がひんぱんに行われていたからである。なかには、化学調味料の入ったポリ袋をひもで内股に巻きつけているヤミ屋もいた。これでは悠然と歩かないわけにはいかないはずだ。

モン州はタイ国と国境を接した南北に細長い州である。そのため、モールメンにはタイ国から流入する密輸品が集中し、それを目あてにラングーンから多勢のヤミ屋がここに集まってくる。私たちの乗ろうとする列車は、モールメンからラングーンへヤミ物資を運ぶ、いわば大動脈だったのである。切符を手に入れ、弁当を買いこんで列車に乗りこむと、先に乗りこんだ女たちはもう何事もなかったかのように、ヤミ物資をからだからはずし、荷物棚や通路に積みあげている。あとはラングーンに着くのを待つだけである。

午後3時前にマルタバン駅を発った列車は、9時前にラングーンの北郊にさしかかった。ヤミ屋が荷物をまとめはじめると、車内は再び賑やかになってきた。そのとき、まるで申し合わせたかのように列車が減速しはじめると、ヤミ屋は荷物を窓から抛りはじめたではないか。沿線には仲間が待機していて荷物を受け取っている。なるほど、こうすればヤミ物資を無事にラングーン市内に持ちこめるわけである。15分ほど減速していた列車は再び加速しはじめ、9時半にラングーン駅に滑りこんでいった。

4年前の訪問時にくらべ、ラングーン市内では消費物資が格段に豊富になっていた。ブラックマーケットもますます賑わっているようだ。モールメンからこうして運ばれてきた商品も店頭を飾っていることだろう。この汽車の旅は、ビルマ式社会主義と民衆のしたたかな生活力との奇妙な混在をみる格好の機会だったように思う。（京都大学東南アジア研究センター助手）